

琉球大学学術リポジトリ

これからの養豚

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 祐一, Matsuda, Yuichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20890

これからの養豚

沖縄の養豚は、甘藷に依存して発展してきたのであるが、近時甘藷ブームにおされて甘藷の生産が激減し飼料に用いられる甘藷が少なくなった為に、1961年に16万頭飼われた豚が、1963年には9万頭に減少している。

一方、住民の食生活の向上につれて豚肉の需要は、益々増加する傾向にある。養豚は、甘藷に依存しなくても経済的飼育が可能であるか、即ち購入飼料に依存しても採算がとれるものかどうかは、興味ある問題である。

著者等は、昨年9月から今年の1月迄、子豚8頭を購入飼料で飼育し、経済性を調査した。

調査に用いた豚は、ランドレース×チエスターホワイトの1代雑種で、目方22kgの子豚が、目方91kgになるまで、いくらの購入飼料を必要とするかを調査した。この調査に用いた飼料の配合割合と飼料給与量は、日本の豚産肉能力検定の方法に近づけるようにつとめたが、経済的給与量を知るために、標準区（日本の豚産肉検定の給与量と同じ）と20%増飼区を設けて調査した。

飼料は、1日分を朝夕2回に分けて与えたが、与えるときは、飼料が、散るのを防ぎ、且食い易くするために、飼料をしめらす程度に水を混ぜた。この配合飼料では、ビタミン類が不足するように考えたから、ビタミン補給のために、青草を給与した。

調査成績は、次のようであった。

1, 標準区は、試験開始時の体重1頭平均22kgから91kgになるまでに即ち体重69kg増加するために、133日を要し、飼料は、276kg食った。体重1kg増加するために、配合飼料4kgを必要としているから飼料要求率は、4である。

2, 20%増飼区は、22kgの子豚が、92kgになる迄に、即ち体重70kg増加するために、113日を要し、飼料を、276kg食ったから、飼料要求率は、3,94となった。

以上のことから、この調査では、標準区と20%増飼区との間に、肥育期間に、3週間の差があつた。即ち、20%増飼区が、21日間だけ早く出荷出来たが飼料要求率には、殆ど差がなく、大体、4ということが出来る。肉質は、標準区が、赤肉歩合が多い傾向に

飼料配合割合 (重量比)

飼料名	前期飼料	後期飼料
麩	31.5%	16.0%
脱脂米糖	12.0	16.0
とうもろこし	38.0	46.0
澱粉粕	—	5.0
糖密	—	6.0
大豆粕	10.0	—
くず大豆	—	3.0
魚荒粕	6.0	5.0
食塩	0.5	0.3
炭酸カルシウム	2.0	2.7
	100.0	100.0

備考 前期飼料は体重50kg迄給与
後期飼料は体重50kg以上に給与。

飼料給与量

体重	未満	配合飼料給与量		青草 (ネピアグラス)
		標準区	20%増飼区	
20kg	22kg	1.0kg	1.2kg	0.1kg
22	24	1.1	1.3	〃
24	26	1.2	1.4	0.2
26	29	1.3	1.5	〃
29	32	1.4	1.6	〃
32	35	1.5	1.7	0.3
35	38	1.6	1.9	〃
38	41	1.7	2.0	〃
41	44	1.8	2.1	0.4
44	47	1.9	2.3	〃
47	50	2.0	2.4	〃
50	53	2.1	2.5	0.5
53	56	2.2	2.6	〃
56	59	2.3	2.7	〃
59	62	2.4	2.9	〃
62	65	2.5	3.0	〃
65	68	2.6	3.1	〃
68	71	2.7	3.2	0.6
71	76	2.8	3.3	〃
76	81	2.9	3.5	〃
81	86	3.0	3.6	〃
86	90	3.1	3.7	〃

あつた。

この調査の1頭91kgの豚を生産するための飼料代と子豚代を計算してみよう。

配合飼料は、現在の相場で、1kg9セントの価格であるから、276kgの価格は、9セント×276セント＝24ドル84セント、となる。

子豚は、割安に購入出来て、16ドルであつたから子豚代＋飼料費＝16ドル＋24、84ドル＝40、84ドルである。

豚の生産費には、子豚代と飼料費の他に、労働費、建物費、器具費、諸雑費が必要であつて、肉豚生産費中に占める割合は、子豚代と飼料費で、75%、労働費その他で、25%とすれば、この調査の豚91kgの生産費は、40、84ドル÷0、75＝54、45セントとなり、生豚1kgの生産費は、約60セント（1斤では、約36セント）になる。

この計算からすれば、生豚価格1kg60セント、又は、1斤36セント以上であれば、購入飼料のみで飼育しても採算がとれるが、それ以下の価格では、労働費等に食いこむことになる。

次に、生産費の低減について考えてみたい。肉豚生産の飼料要求率は、普通、4といわれ、著者等の調査でも、4となつているが、日本の豚産肉検定では、飼料要求率が、3、5以下が沢山出ているから、豚生産費の低減には、飼料要求率を下げることを先づ第一に考えるべきである。このためには、

1、良い豚を選ぶことである。日本の豚改良の考え

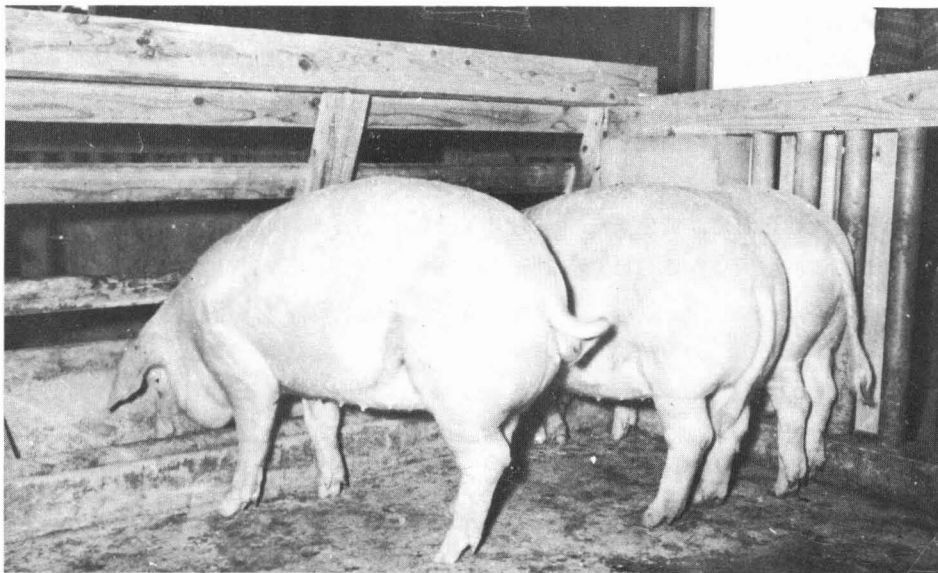
方も、いままでのように、繁殖能力、体形、強健性のみならず、もつと重要な肥育期間の短縮、飼料の利用率、産肉能力についての改良を重点的におこなうようになっていく。

2、飼料の給与に当つては、エネルギー、蛋白質、ビタミン、無機物等に不足しないように心掛ける。自家配合の場合には特に注意する必要がある。

次に、生産費中に、大きな割合を占める子豚代について述べる。日本の鶴巻氏らの報告によると子豚1頭の生産費は、10ドルとなつている。埼玉種畜牧場の笹崎龍雄氏は、次のように述べている。肥育豚飼養の立場からみると、子豚の費用は、総生産費の20—25%を要するものとみてよい。子豚不足で異状の高値のときは、1頭20ドルから25ドルにもなつたが、昭和36年以降は、1頭11ドルから14ドル位となり、枝肉相場kg89セント位からみて均衡がとれていると。

沖縄で、常時、7—8頭以上を飼育する養豚家なら子豚を自分で生産する方が利益は多いのではあるまいか。子豚が高価になれば他に販売してもよい。

なお現在、多頭飼育者が増加しつつあるが、これらの人々は、養豚飼料を残飯に依存している。残飯飼育では、残飯の量が、養豚の増加につれて多くなるとは考えられないので、沖縄の養豚も残飯養豚だけでは、余り伸びるとは考えられない。今後は、飼料の自給、安価な飼料の輸入、飼料の効果的利用等多くの問題の解決をはからなければならない。（松田 祐一）



試験に用いられた豚
(ランドレース × チェスターワイド)